

## 明治中期横浜におけるプロテスタント の社会活動

江 刺 昭 子

本報告のきっかけは、町田市立自由民権資料館が『武相自由民権史料集』を編むにあたり、私が編集委員に参加したことである。自由民権史料集といっても、狭義の自由民権運動の範囲にとどまらず、幕末から日清戦争期までの武相地域の地域指導層の諸活動や社会観をできるだけ網羅することで、当該期の地域社会が抱えていた課題や価値観を示そうというのが意図だった。集めた史料が多すぎて3分の1に削るなど紆余曲折があり、2008年1月に刊行するまでに約10年の歳月を要した。

私の担当は明治10年代以降の「女性」と「宗教」だったが、荷が大きすぎて、第4編第6章「女性の活動、女性へのまなざし」、第7章「宗教と社会活動」をまとめたものの、不満足な結果に終わった。民権家の活動地域とキリスト教の教線が重なったり、接近している地域があり、その関係を示唆できるような史料群を提示しなかったが、十分にできなかった。そのなかで比較的まとまって史料を採録できたのは、明治20年代横浜におけるプロテスタントの社会活動で、本報告はこれに依拠している。

横浜では、明治20年代にプロテスタントが教育事業、社会事業、教化活動などを活発に展開する。その理由は10年代後半のリバイバル運動によって、キリスト教徒が飛躍的に増えたことと、この頃の横浜に労働者が集中することによって窮民層が生まれ、救援を必要とした現実がある。扱ったのは次の4つのグループで、創立と活動内容を簡単に記す。

・横浜禁酒会 日本の禁酒運動は1875年に奥野昌綱が横浜で創立したのが初めだが長続きせず、

86年に林翁らが本格的に活動開始。演説会や機関誌で禁酒社会の実現をめざしている。

・横浜婦人矯風会 横浜婦人矯風会は、横浜独自の組織として1894年に創立したが、まもなく全国組織の日本婦人矯風会の支部になる。中央の矯風会が刑法改正や廃娼運動に力を注いだのに対し、横浜では禁酒にウエイトをおいた活動を展開する。

・横浜基督教青年会 1889年末から90年後半にかけて全国でクリスチャン主導の廃娼運動が起きた。神奈川県でも89年末に県会議員の宮田寅次が県会に廃娼建議をしたが否決。90年に入り横浜基督教青年会が立ち上がる。佐々木笑受郎らは相州地域の議員や名士を訪ねて署名を集め、10月に「県下有志五百名」として知事に廃娼建白書を捧呈、同時に「横浜青年会」として県会に公娼全廃請願書を提出。県会では廃娼が決議された。

・横浜婦人慈善会 1889年に稲垣すえ、ヴァンペテン、二宮わからが貧民救済を目的に設立。施療や施食を行ない、92年には根岸村に横浜根岸病院を設立し、生活困窮者を無料で診察、入院治療。寄付やバザーの収益金で運営した。

以上の4グループの活動から、次のような特徴と問題点が指摘できる。

・廃娼運動を除く3グループのメンバーは重複しており、どの活動がどのグループに属するか特定しがたいものも多い。ということは、キリスト教徒のネットワークがこの時期の横浜にしっかりできあがっていて、献身的な活動を可能にしたといえる。

・禁酒運動は横浜が全国に先駆け、矯風会も中央に追随するのではなく、イニシアティブをとろうとしている。婦人慈善会の病院経営は他地域にない、女だけの息の長い社会事業。いずれも横浜の独自性が発揮されている。

・4つの運動に共通するキーワードは「矯風」。飲

酒、一夫多妻、公娼制度など、日本社会の慣行になっている風俗や制度をプロテスタントの禁欲的倫理観で矯正、廃止しようとしている。しかし、それらが容認されてきた社会のしくみに切り込む姿勢は弱い。

・「横浜禁酒会雑誌発兌の趣旨」、「娼娼建白書」、「公娼全廃請願書」、矯風会の趣意書には共通して人権の視点が弱く、ナショナリズムや皇室崇拜思想が見られる。のちに矯風運動や慈善活動が国家に回収され、戦争協力へとつながっていく理由であろう。

・孤児救済、貧民教育、施療などの慈善活動は圧倒的に女性の手で行なわれている。女性は政治世界から排除され、家庭に押しこめられながら、慈善などの社会事業に限って働き手として期待されている。そうして「期待される女性像」の手本となり、女性役割の固定化につながった面もある。

・これらの実践はキリスト教的思想、倫理観に基づいているが、彼ら実践者たちが自由民権運動最盛期に自己形成した人々であることから、何らかの形で民権思想の影響を受けているのではないかと思われる。いずれその関連を探ってみたい。

## 『よろこばしきおとづれ』

—地理教育からみた明治初期のキリスト教児童雑誌—

齋藤元子

『よろこばしきおとづれ』は、1876（明治9）年12月、横浜山手の居留地において創刊された日本で最初のキリスト教児童雑誌である。発行人は、米国婦人一致海外伝道協会（The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands）により日本に派遣された女性宣教師マクニール（S. B. McNeal）であった。

今から約50年前、作家で牧師でもあった沖野岩三郎は「キリスト教児童文学のさきがけというばかりでなく、日本文学界における児童文学の出現」と『よろこばしきおとづれ』を称賛し、言文一致体を用いていることや科学的な読み物を掲載していることを高く評価している。しかし、それ以降は、同誌に関する実証的な研究はなされてこなかった。

本発表では、東京神学大学図書館に所蔵されている『よろこばしきおとづれ』全号、ならびに同誌の発行に関与した人々の手記、関係組織の報告書などを調査し、『よろこばしきおとづれ』の特徴を明らかにした。さらに、『よろこばしきおとづれ』には傍線で強調された外国の地名が多数掲載されている点と上記の沖野が指摘した「科学的読み物」には地理的な知識を教授するものが多く含まれている点に着目し、地理教育の視点から同誌の分析を試みた。

『よろこばしきおとづれ』は、1882（明治15）年2月まで、月刊誌として全63冊が刊行された。総頁数10頁前後の小冊子で、年間購読料は毎月10部1セットで1円20銭だった。編集には、マクニールのほか、植村正久・吉田信好・井深堀之助・三浦徹が協力をしていた。印刷は、同じく山手の居留地にあったバプテスト派宣教師ネーザン・ブラウン（Nathan Brown）の活版所で行われた。また、米国ニューヨークのブルックリンに本部を置く海外日曜学校協会（The Foreign Sunday School Association）から資金の援助があった。

『よろこばしきおとづれ』の内容は、聖書の話・欧米のキリスト教世界の話・アジアやアフリカの伝道地の話・世界の自然・賛美歌などであった。記事の大半は無記名であるが、署名入り記事の多くは、フローラ・ハリス（Flora Harris）と高橋五郎の二人によって書かれ、それぞれ10以上を数える。フローラ・ハリスは、メソジスト監督派教会宣教師メリマン・ハリス（Merriman Harris）の妻である。高橋五郎は、ブラウン塾で学んだ英学者であり、多数の著書や翻訳書を残している。

『よろこばしきおとづれ』の発行に関わった人々をみると、発行人マクニールは超教派の女性海外伝道協会から派遣された女性宣教師であり、そのほか、改革長老派、バプテスト派、メソジスト監督派の関係者が様々な形で協力をしている。つまり、『よろこばしきおとづれ』は、複数の教派と関わりをもつ超教派的な雑誌であったといえる。

次に、地理教育の視点から分析した『よろこばしきおとづれ』の特徴をまとめてみたい。同誌には、エルサレム・ナザレ・ニューヨーク・ロンドン・カルカット・アラビアといった世界中の地名が、傍線

付きで多数登場する。外国の地名に傍線を引くスタイルは、福沢諭吉の『西洋事情』に端を発すると考えられ、明治期の出版物にしばしばみられる現象で、『よろこばしきおとづれ』に特有のものではない。しかし、外国地名の頻出と傍線による強調は、成人よりも子どもに与えるインパクトははるかに大きかったと推察できる。つまり、それらは、子どもたちに諸外国に対する興味を喚起させる視覚的なツールとして非常に有効であったとみなすことができる。

さらに、『よろこばしきおとづれ』には、世界各地の動植物や自然などを取り上げた地理教育的な読み物がほぼ毎回掲載されている。なかでも注目すべきは、「天然の奇観」と題したシリーズ読み物である。氷山・天然橋・間欠泉・竜巻といった珍しい自然現象が挿絵つきで紹介されている。各現象の定義づけに始まり、外国のどこでその景観を見ることができるのか、日本国内にも類似した場所はあるのかなどが分かりやすく説明されている。

なぜ、女性宣教師マクニールは、『よろこばしきおとづれ』に「天然の奇観」のような地理教育的読み物を積極的に掲載したのであろうか。第一の理由は、当時の日本が地理教育に力を入れていた点にあると考える。学制公布翌年の1873(明治6)年、文部省は最初の官製教科書を3冊出版しているが、その一つが『地理初歩』という名の地理教科書であった。同書は、山・川・海・島といった地理用語の定義を示した書である。『よろこばしきおとづれ』に連載された「天然の奇観」は、『地理初歩』の発展的学習内容を擁するものであるといえる。

もう一点、地理教育的読み物が『よろこばしきおとづれ』に多く掲載された理由として、発行人マクニールのバックグラウンドが関係していると考えられる。マクニールの母国アメリカでは、当時、女性教師・女性宣教師を養成する教育機関としてフィーマイル・セミナーと呼ばれる女学校が数多く設立されていた。フィーマイル・セミナーのカリキュラムをみると、地理は「最初に学ぶ科学」として、主要科目に位置づけられていたことがわかる。つまり、アメリカから異教地に渡った女性宣教師たちの多くは、フィーマイル・セミナーで教育を受け、地理教育の重要性を十分に認識していた一群であったと

いうことである。

以上の考察結果から、『よろこばしきおとづれ』は、日本で最初の児童文学雑誌であったばかりではなく、地理教育の普及に貢献する雑誌でもあったと結論づけることができよう。

## 「和戸教会設立前後の状況」

和戸教会 三羽善次

### I. 武州、和戸村の位置

和戸教会は日光御成街道と古利根川によって区切られた和戸村に誕生した。和戸村は、明治5年当時、戸数100戸余 人口600人余の寒村であった。利根川支流の古利根川は江戸川と結ばれて、江戸中期より江戸に向けての船運が盛んであった。和戸村にも河岸場があり、東京行きに船が使われた。特に鉄道のなかった教会設立前後の時期、横浜、東京からの宣教師、牧師、神学生らの来訪に多大に益した。

### II. 和戸村に福音がもたらされた経緯

和戸教会の設立に至る経緯に関しては、「埼玉県史 宗教篇」、「日本キリスト教歴史事典」などにその概略が記されている。その内容はほぼ以下のようなものである。「小島九右衛門は養蚕の産卵紙販売のために横浜に出た折、病にかかりヘボン療に担ぎ込まれ、そこでヘボンより聖書の言葉にふれ、洗礼を受けて三年の後和戸村に帰った。

これらの記述の元になる文書が何であるかが不明であったが、教会史編纂の作業の中でこの記述の出典が、中田信蔵「東武伝道小史」(大正13年刊の追悼文集「一粒の麥」の中の付録)であることが分かった。

先の記述に関しては、「埼玉県史 産業篇」「埼玉養蚕業史」などの資料により、当時の和戸村には産卵紙を独自に販売するほどの生産高がないことが分かった。小島の横浜行に関しては別の証言として、「七一雑報」の投稿記事が見つかった。投稿者の篠原大同は和戸村出身の西洋医師で(おそらく県内最初の西洋医)、ヘボンより西洋医学を習って和戸で開業していた。投稿文の記述によれば、明治初期の横浜における新しい西洋文化への

関心が小島にあり、篠原にあらかじめヘボンの所在を聞いて赴いたと記している。

これは小島の後に横浜海岸教会で洗礼を受けた和戸村の木工、小菅幸之助の場合にもあてはまる。小菅は宮木工であったが、これからの新しい時代は西洋建築が主流になると見て、西洋建築の技法習得のために横浜に出たと考えられる。小菅はそののち、フェリス女学院校舎、海岸教会の建築に携わる。

和戸教会設立当時、小さな寒村に西洋文化にふれた小島、小菅、篠原がいたことにより和戸に「西洋の新しい風」が吹きこまれたと言っている。

### Ⅲ. 教会設立への道備え

これまでの和戸教会設立に至る記述では、小島、小菅の働きが中心となって記されていたが、今まで知られていなかった篠原大同兄弟の一連の働きがある。大同の弟、篠原間蔵は兄と同じように西洋医学習得のためヘボン塾に入ったのち、明治7年施療所内でルーミスより受洗し、横浜第一長老教会（のちの横浜指路教会）の執事に選出され、献身して一致神学校入学している。神学校時代、山本秀煌らと和戸に伝道し、明治11年、植村、井深、山本秀煌らと共に準允している。また兄牧次郎は、明治11年2月芝公会にてグリーンより受洗し、このことが機縁で、牧次郎宅での家庭集會に麴町教会、海岸教会からの応援伝道がされている（「七一雑報」）。その伝道の成果として篠原大同ら9名が受洗している。また大同が小島にヘボンを紹介した役割も大きいものがある。

教会内ではこれらのことが全く伝えられてこなかったが、その理由として考えられるのは、後に篠原大同は神社に寄付行為をして教会放逐になったりして小菅との感情のもつれもあり、教会の中で果たした篠原兄弟の役割が消去られ、忘れ去られたのであろう。

### Ⅳ. 教会設立

1878年（明治11）10月の一致教会北部中会（のちの東京第二中会）において教会設立申請受理され、10月26日信徒13名をもって教会設立（一致教会15番目の教会、関東では安中教会＜同年3月＞に次ぐ）がなされた。設立式には宣教師アメルマンと奥野昌綱が出席。小島九右衛門宅を仮

会堂として日曜礼拝がされた。

設立時の信徒名 小島九右衛門（農、名主）  
小菅幸之助（番匠＝大工） 同キイ 篠原大同（医師）  
篠原牧二郎（商） 小島虎蔵（番匠） 小林貞之助（籠屋工）  
渋谷善次郎（左官工） 小林与兵衛（農）  
篠原勝三郎（商） 同桑吉（商） 折原織右衛門（番匠）

### V. 設立後の伝道の進展

明治13年、初代牧師として鈴木銃太郎を迎えるも、「嫌疑之風聞」立ち、信徒から中会に訴えられ罷免される（その後、鈴木は明治15年北海道オベリベリ＜帯広＞、十勝、更別の開拓事業に赴く）。明治15年に会堂を献堂する（小菅幸之助による建築、費用310円、その内100円米リフォームドミッションよりの寄付、210円は教会員献金）。

この後、明治14年杉戸講義所を設立し（篠原牧次郎宅）、明治18年杉戸清地会堂を献堂する（建築費1350円）。さらに、偕成伝道女学校ピアソン校長の下、多くの女子神学生派遣により、明治26年粕壁（現在の春日部）講義所を開設、そして明治29年、地代、建築費720円（内ピアソン個人献金390円）によって粕壁会堂が建築された。今にも神の国が実現するかのような伝道の勢いがあったのである。

## 敵国人抑留 戦時下の外国民間人

小 宮 ま ゆ み

はじめに

1941年12月のアジア太平洋戦争勃発と同時に日本に在留する外国人のうちアメリカ人、イギリス人等は自らの意思と関わり無く「敵国人」の烙印を押され、各地に設けられた敵国人抑留所へ抑留された。その多くがプロテスタントの宣教師やカトリックの修道士・修道女だった。同じく対戦国アメリカでは、太平洋沿岸に住む11万人におよぶ日本人や日系人が、内陸の収容所へ強制収容された。アメリカでの日系人収容は体験者も多く有名な史実になっているが、日本での敵国人抑留については、従来ほとんど知られていなかった。この史実について私は

約 16 年前から調査研究を進め、今年 2 月吉川弘文館から『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』という本を出版した。

### 1. 抑留第 1 期（開戦時～1942 年 8 月）

日本政府は日米開戦前から、開戦に備えて敵国人抑留の準備を進め、1941 年 12 月 8 日の太平洋戦争開戦と同時に抑留を開始した。開戦時には全国に 34 ヶ所の敵国人抑留所が設置された。ほぼ各県ごとに設置された抑留所は、その半数以上がキリスト教関係施設だった。開戦前からの計画に従って抑留所に収容されたのは、すべて従来から日本に在住していた会社員や貿易商、教師や宣教師、修道士や修道女で、その多くは成人男子（内務省通牒では「兵役適齢期 18 歳以上 45 歳までの男子」）だった。東京では立教大学のポール・ラッシュや青山学院のローランド・ハーカーが抑留された。42 年 3 月末に抑留所は宮城、東京、神奈川、兵庫、広島、長崎の 6 都県に統合された。1942 年 6 月の第 1 次日米交換船が出航し、これらの抑留所から 76 名、7 月には日英交換船で 60 名の抑留外国人が帰国した。

### 2. 海外から連行された外国人の抑留

しかし戦争の進展と共に、外地から捕虜と共にあるいは拿捕された船に乗ったまま、多くの外国人が日本に連行され抑留された。まず 1942 年 1 月には、グアム島作戦で捕虜と共に連行されたアメリカ人が神戸に抑留された。以降、北海道にアッツ島のアリユート人、福島県にドイツによる拿捕船ナンキン号乗客、神奈川県にラバウルで捕虜になったオーストラリア人看護師、広島県にインドネシアで拿捕された病院船のオランダ人士官と看護師、宮城県に同じ拿捕船のインドネシア人水夫、東京都にジャワで抑留されたオランダ人電気技術者と、大量の連行型抑留者を抱えることになった。彼らは日本の生活習慣になれず、面会や差し入れをしてくれる友人も無く、その生活は厳しかった。

### 3. 抑留第 2 期（1942 年 9 月～1943 年 9 月）

緒戦の勝利が過ぎ去り戦況が厳しくなると、1942 年 9 月新たに在日外国人のうち「女子と高齢者を含む教師・宣教師・修道女・保母」の抑留が始まった。交換船による帰国で空きが出来た抑留所に、今度は女性が送り込まれ、更に抑留所を男女別にす

るために大規模な抑留者の交換と移動が行われた。横浜英和のハジスや山梨英和のグリーンバンクをはじめ、多くのキリスト教学校の宣教師や修道女が抑留された。1943 年 9 月の第 2 次日米交換船が出航し、抑留者のうち 73 名が帰国した。

### 4. 抑留第 3 期（1943 年 10 月～1945 年初め）

1943 年 9 月イタリアが降伏すると、それまで同盟国だったイタリア人が敵国人となる。10 月からイタリア人が新たな抑留対象となり、大使館公使館員など外交官とその家族は東京田園調布の修道院へ、民間人は愛知県名古屋市内に抑留された。また横浜山手などに居住していた外国人は、女性も老人も子供も 1943 年 12 月厚木の七沢温泉に抑留された。食料不足から抑留所の生活は次第に厳しいものとなった。

### 5. 抑留第 4 期（1945 年初め～終戦時）

1945 年、本土決戦準備から九州地方ではあらたな抑留の拡大が行われ、従来抑留対象とされていなかったポーランド人やフランス人も含め外国人は根こそぎ抑留された。新たな抑留所は阿蘇山や英彦山の山中の辺鄙なところであった。また厚木に抑留されていた民間人は秋田県横手市へ、田園調布に抑留されていたイタリア人は秋田県鹿角郡へと移転させられた。東京ではユダヤ系ドイツ人も抑留され、空襲による抑留所の焼失も起こった。食料不足は深刻になり、抑留所で亡くなる人も相次いだ。終戦時に抑留されていたのは全国で 876 名、抑留中の死亡者は 50 名が判明している。

### まとめ

太平洋戦争下の外国民間人の抑留は、従来ほとんど知られていなかった戦争加害の歴史である。戦争全期間では約 1200 名の外国人が抑留された。抑留された外国人の多くは、日本に長年居住し教育や文化の面で日本に貢献した人たちだった。また日本が侵略した海外の占領地からも、多くの民間人が連行されて抑留された。現在のところ日本政府は抑留に対し謝罪も補償もしていない。抑留された人の多くがキリスト教宣教師であったことは忘れてはならない。

〈2008年度会費納入者氏名〉

〈編集後記〉

会報の発行が遅くなりまして大変失礼しました。今年はヘボン、S. R. ブラウン、フルベッキなどプロテスタントの宣教師が来日して150年を迎えた年となりました。横浜でもこれに関係する行事が多く行なわれました。当研究会では昨年『横浜開港と宣教師たち』を出版し、今年の7月に再版も出まして話題を提供しました。また当研究会のメンバーのなかには昨年から今年にかけて宣教師の研究で多くの実りがありましたことを感謝しています。日本のキリスト教は伸び悩んでいますが、受洗者を生み出す教会にならなければ発展はありません。そのためにどうすればよいかをともに考え、ともに祈りを熱くしていきたいものです。（岡部一興記）